

九学の歴史に輝く人々



ささき ちとせ
佐々木 千歳
(1916年～1993年)
英語教諭 (在職:1948年～1978年)

～ヘレン・ケラー女史の通訳として日本行脚～

日本語学校の校長を父にハワイで生まれる。1930年、県立菊池高等女学校に入学。大阪の灯影女学校(現府立阿倍野高校)に編入。卒業後に同校の職員。1937年、ヘレン・ケラー女史が来日の際、同校の校長の紹介で通訳に抜擢される。1948年、九州学院の英語科教諭となり、同年8月、再来日したヘレン・ケラー女史の通訳として2ヶ月間の全国公演の行脚に同行。1951年、フルブライト留学生としてコロンビア大学に入学。フランクリン・ヘバーカー賞を受賞し卒業。1955年、帰国前にコネチカット州のヘレン・ケラー邸を訪問、握手した瞬間に女史が「ササキ」と口を動かしたという有名なエピソードが残っている。帰国後は洗練された英語で指導力を発揮、高松杯全国中学校英語弁論大会などで優勝者を輩出するなど活動を続けた。



中央がヘレン・ケラー女史、右端が佐々木先生

火の国旅情

作詞：岩代浩一、中沢昭二
作曲：岩代浩一

1. (阿蘇)
阿蘇は火の山 空の涯
何を折って吐く煙
遠い神代の 愛の詩
邪馬台の国に ながれている
ながれている ふるさとよ

2. (天草)
不知火かなし有明の
海に真赤な陽が沈む
パタレンの島 天草の
クルスマふおしや 青い海
青い海 ふるさとよ

3. (山鹿)
蛩舞う夜の ともしびは
よへほ踊りの 人の波
山鹿灯籠 湯の宿で
昔の人に 逢えそうな
逢えそうな ふるさとよ

4. (熊本市)
風よ吹け吹け 雲よ飛べ
越すに越されぬ田原坂
仰げば光る 天守閣
涙をためて ふりかえる
ふりかえる ふるさとよ

いわしろ こういち
岩代 浩一
(1930年～2012年)
旧34回(1948年卒) 作曲家

～熊本県民歌「火の国旅情」を作詞・作曲～



熊本県阿蘇に生まれる。1948年、九州学院卒業。中学生時代、番組としてスタートしたばかりの「のど自慢」に出場し、優秀賞。犬童球溪の長男で熊本県教育界筆頭の梅沢信一に師事。1952年、熊本大学教育学部国文科卒業。中学校教諭となる。1953年、作曲家を志して上京。東京芸術大学教授の松本民之助、島岡譲に作曲理論を師事。1958年よりテレビ番組「歌の広場」などの音楽を担当。以後様々な放送番組や舞台(演劇)などの音楽を数多く担当。熊本県民歌「火の国旅情」など、全国の抒情歌も多く作曲。また、県・市町村歌、校歌、社歌など多数作曲。中山晋平賞、カンズ国際音楽賞、日本作曲家協会優秀賞などを受賞。

ふるた まさゆき
古田 昌幸
(1933年～1999年)
S4回(1952年卒) 野球選手(内野手)・監督

～殿堂入りした「ミスター都市対抗」～

熊本市に生まれる。1952年、九州学院高校卒業後、立教大学に進学。野球部では大沢昌芳(後に大沢啓二)と同級生で、長嶋茂雄、杉浦忠らの二年先輩。大学卒業後は熊谷組に入社し二塁手として活躍。社会人野球の熊谷組で選手、のちには選手兼任監督として活躍し「ミスター都市対抗」と言われた。1956年から13年連続で都市対抗野球大会に出場し、3度の優勝に貢献。1957年、第3回世界野球大会(米国)に日本代表で出場し、決勝のカナダ戦で延長13回表に決勝打を打ち日本を初優勝に導く。晩年は日本野球連盟理事等を歴任し、没後の2010年に特別表彰で「野球殿堂入り」を果たした。



ひらい まさお
平井 正穂
(1911年～2005年)
旧14回(1929年卒) 英文学者

～イギリス文学の正統的研究者～

福岡県久留米市生まれ、福岡市で育つ。1929年、九州学院を卒業後、旧制第八高等学校を経て、1935年に東京帝国大学英文科に進む。同大大学院を卒業して東京帝国大学文学部の助手。1948年、東京帝国大学英文科助教授に昇任し、教授、文学部長を歴任。1972年に定年退官後は武蔵大学にて教鞭を執った。小泉八雲、夏目金之助、斎藤勇に継いで東大英文科を担い、高橋康也、丸谷才一、宮崎雄行など、数多くの優秀な教え子を輩出した。また、ジョン・ミルトン、T・S・エリオットなど英文学の正統的研究者として、イギリス文学史(筑摩書房1968、筑摩叢書1980)、トマス・モア「ユートピア」(新月社1948、岩波文庫1958)、ダニエル・デフォー「ロビンソン・クルーソー」(筑摩書房(世界文学大系)1959、のち岩波文庫上下、改版2012)、シェイクスピア「ロミオとジュリエット」(集英社・世界文学全集1973、岩波文庫1987)など多くの著書や翻訳を世に出した。東京大学名誉教授、英文学者、日本英文学会会長、日本学士院会員。

ふちがみ もうせん
淵上 毛銭
(本名:淵上喬) (1915年～1950年)
旧18回(1928年入学) 詩人

～珠玉の作品を残した天逝の詩人～

「再生」

野菊があたりまへに咲いてある
原つばだが牛もゐない
寝ころんでみる
風が少しあるので
野菊がふるへてある
背中が冷めたい
どくどくと地球の脈がする
嘘のないお陽さまが
僕を溶かしてしまひさうだ
なにもかもが僕の心をきいてある
野菊は咲いてあるし
ここにこのまま埋まつてしまひ
来年の野菊には
僕がひいらいたひらいた

葦北郡水俣町(現水俣市)に生まれる。1928年に九州学院に入学し、その後青山学院中等部へ進学したが、結核性脊椎椎カリエスを病んで中退、帰郷。以後、寝たきりの生活を余儀なくされる。病床で詩作を始め、「九州文学」などに作品を発表。代表作に「柱時計」など。ユーモラスで一面スケールの大きい詩風と評される。また、戦後の1946年、水俣青年文化会議を組織するなど、郷里の文化活動の発展に貢献した。

水俣市わらび野には「生きた 風た 書いた」と記された墓石があり、隣接する詩碑には「風と光 愛と花 神神の絶ゆることなし」とある。1998年、市民により「淵上毛銭を顕彰する会」が組織された。さらに、「合唱団みなまた」が毛銭の詩に曲をつけた「七つの生きているうた」や、女声合唱組曲「約束」などがコンクールで歌われるなど、35歳で天逝した偉大な詩人の作品は現在も生き続けている。



うと とらお
宇土 虎雄
(1891年～1986年)
体操、柔道教諭 (在職:1916年～1986年)

～熊本近代スポーツの父～

長崎県南高来郡湯江村に生まれる。幼い頃から相撲、柔道、水泳、陸上などスポーツに才能を発揮。1916年東京高等体育専修科を卒業と同時に、鎮西学院(長崎)の同窓山参良初代院長に招かれ、九州学院の体育科教師となる。五高、熊本師範などでも体育講師を兼任。1937年、体育研究のために6ヶ月間米国に渡航。アメリカ柔道連盟の招へいにより柔道の普及にあたる。1947年に九州学院教諭を退職した後も、柔道を中心に陸上競技など熊本県近代スポーツ全般の振興に尽力した。1967年、勲四等瑞宝章を受賞。「熊本近代スポーツの父」と称される。

ふくしま じろう
福島 次郎
(1930年～2006年)
旧32回(1947年卒) 小説家

～異色の作品で芥川賞候補にも～

1930年、熊本市に生まれる。1946年九州中学校(一時改称)卒業後、貯金局に勤務。1947年、東洋大学専門部国漢科に入学。1950年、東洋大学国文学科に入学。書生として三島由紀夫と交流を持ち、その後も親交を保つ。1953年から県立八代工業高等学校に国語教師として勤務する傍ら、同人誌に小説を書き続けた。1961年、『現車(うつつぐま)』で第3回熊日文学賞を受賞。1975年、『阿武隈の箱』で第8回九州文学賞を受賞。1987年、教職から退いた後は文筆活動に専念。1996年、高校教師と生徒との関係を描いた『バスタオル』、1999年の『蝶のかたみ』が共に芥川賞候補となった。晩年は健康を害して入退院を繰り返したが、その間も2005年に、『花ものがたり』、『淫月』などを発表。また、県民文芸賞の選考委員も務める傍ら、自伝的小説『いつまで草』、随筆『花のかおり』を熊本日日新聞紙上に連載していた。



(熊本日日新聞社提供)

いぬい しんいちろう
乾 伸一郎
(本名:上塚眞雄) (1906年～2000年)
旧9回(1924年卒) 小説家、翻訳家

～ユーモア小説・動物小説を次々発表～

米国シアトルに生まれる。1912年に母とともに帰った郷里熊本県で育つ。1919年、九州学院中学校に入学。青山学院高等部商科在学中の1928年、翻訳が「新青年」に採用された。1930年卒業後、博文館に勤務。「新青年」に探偵小説を書き、『講談雑誌』編集長、「新青年」編集長を歴任。1938年にフリーとなり、文筆に専念。戦後『青いノート』『コロの物語』などNHK連続放送劇の脚本を手かける。九州学院の寄宿舎を舞台とした『敬天寮の君子たち』をはじめ、ユーモア小説、動物小説を多く書いた。1960年代から推理小説などの翻訳を数多く手かけ、アンソニー・パージェス時計じかけのオレンジ』の訳者としても知られる。ロアルド・ダール『幽霊物語』(ハヤカワマスター文庫1982)が選作。

うえの てるや
上野 輝彌
(1930年～)
理科(生物学)教諭 (在職:1953年～1963年)
新制1回(1949年卒)

～シラカンスに関する研究の第一人者～

1930年大分県生まれ。1946年九州学院高校に入学し、高校第1回卒業(1949年卒)。1949年熊本大学教育学部に入学。1953年同大卒業後、九州学院教師に就任。1956年に米国に留学し、1961年米国ミシガン大学大学院にて博士号(動物学)取得。日本ルーテル神学大学教授および東京大学、東海大学講師を経て、国立科学博物館古生物第三研究室長、国立科学博物館地学研究部部長を歴任し、国立科学博物館名誉研究員。日本シラカンス学術調査隊解剖・解析委員長、元日本魚類学会会長、日本魚類学会名誉会員、アメリカ魚類・両生爬虫類学会外国名誉会員。江の島水族館名誉館長。北アメリカ大陸、メキシコの淡水魚類の骨格、化石、染色体などを研究。日本におけるシラカンスに関する研究の第一人者。著書に「現代の魚類学」(朝倉書店1988)、「日本産魚類大図鑑」(益田一著・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫編、東海大学出版会1988)、「シラカンス・はるかかな古生代の証人」(講談社現代新書1992)、「魚の分類の図鑑―世界の魚の種類を考える」(東海大学出版会1999)、「日本の魚―系統図が明かす進化の謎」(中公新書2004)等多数あり。



こうづま まさゆき
上妻 博之
(1879年～1967年)
博物教諭 (在職:1912年～1959年)

～熊本の植物学、郷土史のパイオニア～

旧鹿託郡健康村に生まれる。植物、郷土史研究者で、熊本の植物学の父と称えられ、約半世紀にわたって九州学院で博物教師として奉職した名物教師である。熊本県近代文化功労者、第7回熊日社会賞を受賞、従五位勲四等瑞宝章受章。熊本師範学校卒、熊本高等小学校卒職、博物の文部省検定試験合格。1912年、遠山参良院長の懇望により九州学院に勤務、館物、動物、植物の教科を担当し、一々実物を示しての教授であったから、生徒達の興味は尽きることがなかった。標本室は遠山院長に譲り、当時としては理想的な設備であった。この特別教室で行われる博物の授業は、生徒たちの期待の授業であった。また、授業中に使われた6尺の竹の棒は有名であった。植物学では牧野富太郎に師事。田代善太郎にも指導を受け、県内各地の植物採集および調査を行ったが、特に牧野との子弟の交わりは有名で、牧野が熊本を訪れたときは必ず上妻宅に滞在して、共に山野を歩き回ったという。郷土史関係では、(肥後先哲遺跡)の編者武藤謙男を師として、資料収集や研究に没頭した。1921年熊本県史蹟天然記念物調査委員の名を受け、「相良のトビカズラ」「竜田山の八重クチナン」「本間寺ノリ」等の天然記念物の調査に奔走。昭和6(1931)年には陸軍特別大演習に際し、植物標本7,000点余りを天覧に供した。同年、その後続く「熊本記念植物採集会」を創設した。

くらはら しんじろう
蔵原 伸二郎
(本名:蔵原惟賢) (1899年～1965年)
旧3回(1918年卒) 詩人

～詩才を発揮し日本詩人賞など受賞～

「きつね」
冬日がっている
いちめん
すすきの枯野に冬日がっている
四五日前から
一匹の狐がそこにておむっている
狐は枯れすすきと光と風が
自分の存在をかくしてくれるのを知っている
狐は光になる 影になる そして
何万年も前からそこに在ったような
一つの石になるつもりなのだ
おしよせる潮騒のような野分の中で
きつねは ねむる
きつねは ねむりながら
光になり、影になり、石になり雲になる
夢をみている
狐はもう食欲がないので
今ではこの夢ばかりみているのだ
夢はほだいにふくらんでしまって
無限大にひろがってしまって
宇宙そのものになった
すなわち
狐はもうどこにも存在しないのだ



阿蘇郡黒川村(現在の阿蘇市)に生まれる。父惟暁は神官で阿蘇神社の直系。母は医学者北里柴三郎の妹。1918年に九州学院を卒業。在学中には中国詩に親しむなど詩魂を育む。慶應義塾大学文学部仏文科に学ぶ。同校に青柳瑞穂や石坂洋次郎がいた。1923年、大学在学中に萩原朔太郎「青龍」に触発されて詩を書き始め、「三田文学」「キョト」に作品を発表。1939年、第一詩集「東洋の満月」を刊行。萩原朔太郎や川端康成に激賞される。1943年、「戦間機」で第4回詩人懇話会賞を受賞。1944年、「戦間機」および「天目の子ら」で第3回日本詩人賞を受賞。晩年は、文化財保護審議員として飯能城(埼玉県)を研究。1964年、北里研究所附属病院に入院中、第六詩集「岩魚」を刊行。これに対して、1965年に第16回讀賣文学賞詩歌俳句賞を受賞、その直後に病没した。阿蘇市の生家跡に詩碑がある。